

日本の諸地域 中部地方 北陸の産業と雪とのかかわり

石川県 金沢大学附属中学校 坂井宏行

1 はじめに

学習指導要領では日本の諸地域の学習について、七つの「考察の仕方」を基にして地域的特色をとらえさせるとしている。それを受けて、『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）の「中部地方」は「産業を中核とした考察」を主に構成されており、本時の授業もそれに沿った形で計画した。

現在、北陸地方は北陸新幹線の開業によりその魅力が全国的に再認識されることになった。とくに本校が位置する金沢市は多くの観光客でにぎわっている。今回、北陸の産業について授業を構築するにあたり、地元である石川県の産業を中心に授業を構成したいと考えた。そこで代表的な地場産業である繊維工業に注目し、その特色について考察させることで、北陸地方に共通する雪の影響という自然的条件について理解させることにした。

また、本時では課題解決のための資料の読み取りだけではなく、北陸地方の産業を位置や広がりからとらえさせるため、『中学校社会科地図』（以下、地図帳）を活用するなど、資料活用場面を積極的に取り入れた。

2 単元計画

本単元では前述の通り「産業」を中核とし、それを気候、地形、交通、経済等のさまざま

な面と関連づけて、中部地方の地域的特色を考察させる。そこで、単元を貫く課題として「東海、中央高地、北陸では、なぜ異なる産業が発展していったのだろうか」を設定した。三つの地域にみられる産業の立地条件について考察させることで、それぞれの地域の相違点や共通点に気づかせ、最終的に中部地方全体の地域的特色を理解させたい。以下はその単元計画（題材名、ねらい）である。

1次	中部地方はどのような地方だろうか 中部地方の概要について理解し、学習課題を意欲的に追究しようとする。
2次	輸送機械工業がさかんな東海 東海地方で輸送機械工業がさかんになった理由を考察することで、地域的特色を理解する。
3次	名古屋大都市圏と東海の農業 名古屋大都市圏との関連から東海地方の農業について調べ、その地域的特色を理解する。
4次	変化する中央高地の農業 中央高地で果樹栽培や電気機械工業がさかんになった理由を考察することで、地域的特色を理解する。
5次	北陸の産業と雪とのかかわり 北陸地方で地場産業がさかんになった理由を考察することで、地域的特色を理解する。

本稿

3 本時の授業構成のポイント

本時の授業を考えるにあたり、学習課題を「なぜ石川県で繊維工業がさかんになったのだろうか」とした。複数の資料を読み取らせて解釈させることで、加賀藩の努力や動力式織物機の開発・普及等の社会的条件と、冬場

の降雪といった自然的条件とを考えさせたい。そして、その自然的条件から北陸の地場産業の特徴をとらえさせるよう授業を構成した。また、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるために、以下の2点を意識した。

(1) 多面的な考察

学習指導要領の教科の目標にもあるように、社会科の学習を通して身につけるべき能力・態度の育成において、多面的・多角的に考察する力の定着は不可欠である。本校社会科では、「多面的な考察」→「多角的な考察」→「多面的・多角的な考察」といったスパイラル構造を意識した指導により、多面的・多角的に考察する力の定着が図れると考え、実践を重ねてきた。そのなかで、本時の題材は「多面的な考察」に適していると考え、繊維工業の発展における自然的条件、社会的条件の二つの面から考察させることにした。また、どちらか一方の面からしか考察できなくても、意見交流や板書による意見の共有によって、最終的には多面的な理解が図れると考え、意見を共有できる場面を授業内に設定した。

(2) 根拠を明確にした考察

多面的・多角的に事象をとらえることができても、それが単なる思いつきでは適切に考察したとはいえない。そこで、資料から根拠となる情報を読み取らせ、それを基に考えることを意識させ、論理的に考察する力の定着を図った。具体的には生徒の考察を①資料から得られた情報(根拠)、②根拠に対する解釈、③結論の三つに分けてまとめさせ、思考の流れを可視化させた。これにより、他者の意見との比較が容易となり、自分の考察に対する評価が促されると考えられる。また、解釈については、論理の飛躍がおこらないよう、机間巡視等で個別に指導したり、意見交流のなかで相互評価を行わせたりする等の工夫を行った。

4 本時の授業展開

(1) 導入

①北陸新幹線の利用者の特徴をとらえる。

発問：石川県を訪れる北陸新幹線利用者のおもな利用目的は何だろうか

単元「地域間の結びつきの特色」での学習や日々の生活経験のなかから、すぐに「観光」という視点が生徒からあがった。さらに、その観光目的を考えさせるなかで、魅力ある多くの伝統的工芸品が生産されている地域であることに気づかせた。一方、「石川県には大きな企業が少ない」「とくにめだった産業がない」と感じている生徒が多く、「仕事」で訪れるという視点には結びつきにくかった。こうしたところから、石川県の産業の特徴に興味や疑問をもたせようと考えた。

②石川県の産業の特徴を資料から読み取る。

発問：石川県の産業にはどのような特徴がみられるのか

ここでは地図帳の統計資料p.151～152を用いて生徒に調べさせた。農業では水田率が全国的にみて高いこと、工業では出荷額の総額は少ないが繊維工業は全国で5位であることを読み取らせた。ここで、石川県の農業では稲作が中心であること、工業では繊維の生産がさかんであることを、確認させ本時の学習課題を提示した。

(2) 展開

<学習課題>

なぜ石川県で繊維工業がさかんになったのだろうか

①資料を読み取り、学習課題について考察する。

資料1～3(図1～3)を生徒に提示し、課題について考察させた。ここでは「石川県で繊維工業がさかんになった」という結論を

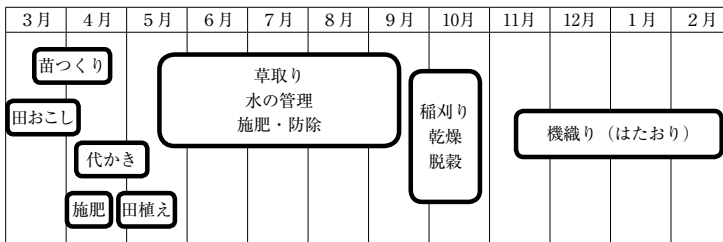
導き出すために、資料から得られた情報（根拠）と根拠に対する解釈とを分けて生徒に考えさせることにした。学習課題に対して資料1からは社会的条件、資料2・3からは自然的条件についてそれぞれ考察することができる。また、すべての生徒に限られた時間のなかで、二つの面について考察することは難しいため、(ア) 資料1だけを用いる、(イ) 資料2・3だけを用いる、(ウ) 資料すべてを用いる、のいずれかを生徒に選ばせた。(ア)は論理の飛躍がないよう解釈を加えられるか、(イ)は二つの資料を適切に関連づけられるかが考察のポイントとなる。

生徒が各自で考察した結果をまとめた後、数分間、生徒同士の意見交流の時間を設けた。ここでは、他者の考えにふれさせることで思考を深めさせるだけではなく、根拠が明確となっているか、論理の飛躍がないか等の観点から生徒同士の相互評価を促し、自身の考察

江戸時代以前	加賀で養蚕がさかんに行われる。
江戸時代	加賀藩による小松の絹織物(加賀羽二重)の保護・奨励 生産集荷・販売を藩が管理
	邑知瀧で芋紮の生産がさかんとなる 加賀藩による邑知瀧周辺の能登上布の保護・奨励
明治時代	小松でボタン機を工場に設置 →輸出用の羽二重の産地を形成
	能登上布が羽二重業におされて衰退 →一部で上布業から羽二重業への転換
	金沢の津田米次郎が日本初の動力式絹織機を開発 県内各地で津田の動力式絹織機が広がる

(図1) 資料1 石川県の繊維産業の歴史

矢ヶ崎孝雄『ふるさと加賀・能登～身近な地域の地理巡検～』
石川県高等学校野外調査研究会『加賀・能登の伝統産業～今に伝わるふるさとの技術』より作成



(図2) 資料2 近世～近代にみられた石川県(小松や邑知瀧)の農村のスケジュール

小田吉之文『加賀藩農政史考』、田中喜男『近世産物政策史の研究』
農林水産省HP「くらべてみよう昔といまのコメ作り」より作成

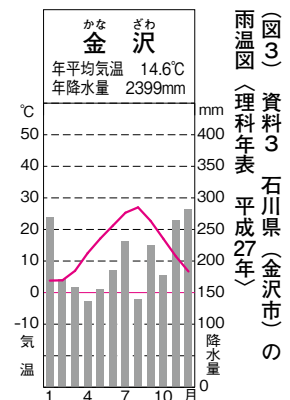
の加筆・訂正も行わせた。また、考察した結果をうまくまとめられなかった生徒が質問する場としても活用した。右の表は実際に生徒がワークシートに書いた意見をまとめたものである。

意見交流の後に生徒の意見を発表させ、資料1から出た理由、資料2・3から出た理由に分けて解釈のみ板書し、意見の共有を図った。
②繊維工業がさかんになった理由の二つの面を認識させる。

発問：資料1から出た理由、資料2・3から出た理由はそれぞれどのような言葉でくることが出来るか

自然的条件や社会的条件という言葉は教師側の言葉であるため、ここでは、これらの語句を使わずに石川県の繊維工業がさかんになった理由の二つの面を生徒にとらえさせたい。この発問に対して、生徒からは前者は「歴史」「工夫」、後者は「自然」「気候」などの解答

が出てきた。ここから石川県の繊維工業は必ずしも自然環境が適していたからという環境決定論的な見方だけではなく、藩の努力や人々の工夫などの面からもみる必要があることを確認した。また、教科書に出てくる「単作」、「地場産業」の語句の意味についてもここで確認した。



(図3) 資料3 石川県(金沢市)の
雨温図(理科年表 平成27年)

(表) 生徒から出た意見

	資料から読み取ったこと (根拠)	根拠に対する解釈
資料1から	・江戸時代に加賀藩によって加賀の絹織物や能登の上布の生産が保護・奨励された。	・藩の保護・奨励により環境が整えられ、生産者が安心して生産できるため。安定した職となったため。生産者が増えたため。
	・養蚕や苧紮の生産など、織物の原料がそろっていた。	・原料を他からもってくる必要があまりなく、機織りを行うのに適していたため。
	・明治時代に国内初の動力式絹織機が発明され、県内に広がった。	・効率よく、大量生産できるようになったため。
資料2・3から	・11月～2月は農業が行われず、機織りが行われる。(資料2) ・金沢は冬の降水量が多く、気温が低い。(資料3)	・11月頃から気温が下がり、雪が降るため、農業ができず、室内で作業できる機織りが環境的に合っていたため。 ・農業ができないから、家の中でもできる機織りを行ったため。 ・農業のできない冬にお金を得るために必要だったため。 ・農業と両立できるため。

③北陸に共通する地場産業の特徴と自然環境との関連をとらえさせる。

発問：北陸地方ではどのような地場産業がさかんだろうか

地図帳p.104 (新潟県), p.97 (富山県), p.89 (福井県) を用いて、地図中のイラストから各県でみられる地場産業や伝統的工芸品を読み取らせた (図4)。北陸各県の気候の類似性から、石川県の繊維工業の学習と福井県の羽二重や新潟県の小千谷ちぢみ、塩沢つむぎ等

が生産された背景との関連を生徒に気づかせるようにした。ここでは、冬場の雪という北陸に共通した自然的条件を見出させ、雪が地場産業や伝統的工芸品の生産に結びついていることを確認した。また、教科書p.215 10行目からの本文を確認させ、雪どけ水の利用についてもおさえておきたい。

(3) 終結

本時のまとめとして、北陸地方では気候の影響 (降雪) から農閑期となる冬場の産業として、伝統的工芸品の生産や地場産業がさかんになったことを確認したい。また、それらは自然的条件だけではなく、それぞれに社会的条件も存在していることも理解させたい。

5 おわりに

今回は石川県の繊維工業を教材化し、①自然的条件・社会的条件の両面から多面的に地理的事象を考察させること、②根拠を明らかにして考察させること、に留意して授業を構成した。日々の授業のなかでこうした点について意識しながら、生徒の思考力・判断力・表現力の育成に努めたい。

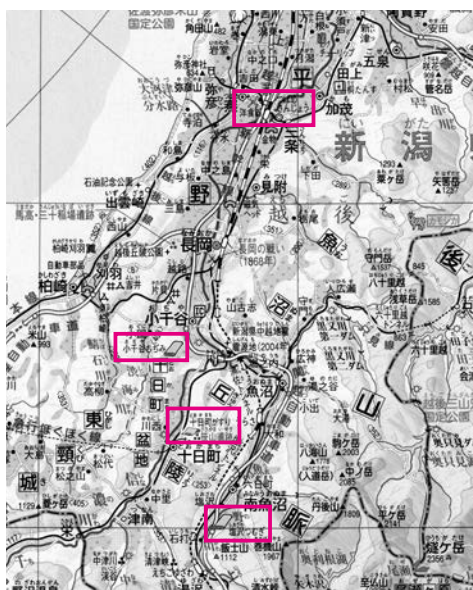


図4 新潟県の例 (『中学校社会科地図』 p.104)